

「新しい教科書と教科書検定」の記事で疑問に思うこと

2019年3月30日 生形 章

新学習指導要領に準拠した各教科の教科書の新聞記事と、2年前の道徳科の教科書検定に際しての新聞記事を紹介する。

(2019.3.26 産経新聞)

新指導要領で「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められたことから、各教科ともグループ活動や振り返り学習などが教科書に多数盛り込まれた。音声や動画を視聴できるウェブサイトのURLやQRコードなど2次元コードを記載した教科書も大幅に増加。アニメーションなどにより、子供たちが進んで勉強するような工夫が随所に施されている。

(2019.3.27 朝日新聞)

新しい指導要領は「主体的・対話的で深い学び」を目指し、知識を得るかどうかだけでなく、学ぶプロセスも重視している。このため、各教科で対話形式の記述が増えた。また、若手教員が増えていることを踏まえ、板書例や授業の時間配分案などを書き込む教科書もあった。

(2017.3.25 東京新聞) 2018年度から使われる道徳教科書検定結果について

中身だけでなく、文科省は教科書を使った授業のやり方にも注文をつけた。

出版社は教師が指導しやすいようにと、読み物の冒頭や末尾に設問を入れるところが多かった。

そんな中、低学年向けの教科書だけ、あえて設問を入れなかった社もあった。「指導の自主性を尊重したいという考えから」(編集者)だったが、指導要領が定めた「問題解決的な学習について適切な配慮がされていない」という意見がついた。

最終的には、設問を挿入して検定を通ったが、編集者は「設問をあらかじめ示すことは、読み手の子どもに先入観を与え、読み方を規定することにつながりかねない。

『考える道徳』に反しないか」と疑問視する。

※下線付は生形

新しい学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」を得るために、教科書も対話形式の記述を増やし、グループ活動や振り返り学習などを多数盛り込むことや、音声や動画を視聴できるQRコードを記載して主体的に学習に取り組めるように工夫したことはとても良いことだと考える。

しかし、「具体的な板書例」や「先生の声かけ例」「授業の目安時間」「気づかせたいポイント」などを教科書に記載するのはいかなるものか？

新聞報道によると、「親切設計の教科書」が目立った背景には、若手教員の増加や「若手教員への指導技術の伝承が難しくなっている」ことがあるという。

また、教員の働き方改革の議論の中で、長時間労働の大きな要因の一つが、教科書以外の資料などからの情報を収集して教材化したり、学習プリントを作成したりする、いわゆる「教材研究」に時間がかかることで挙げられるので、教科によっては今まで先生が自分で材料を集めたり作ったりしていたことを、最初から「コラム」として教科書に盛り込んだのだという。

採択側の教育委員会からも「若手に使いやすいように」との声が出ている(?)ことから、教科書は今後ますます「先生に親切設計」になっていくのだろうか？

朝日新聞によると、新教科書を見た若手教員の中に「教科書にヒントが載っているので授業がスラスラ進む」という声がある一方、「このように議論し、こうまとめて、このように考察しましょうと教科書が示したら、主体的ではなくなる」という声もあるという。

また、東京新聞の道徳の記事にある「設問をあらかじめ示すことは、読み手の子どもに先入観を与え、読み方を規定することにつながりかねない」という編集者の思いは、今回の各教科の教科書検定では出なかったのだろうか？ それとも文部科学省の指示によりすでに訂正されたのだろうか？

「親切設計の教科書」は教員にとって本当に「親切」なのか？

「親切設計の教科書」は子供たちに「主体的で対話的な深い学び」をもたらすことができるのだろうか？

以上